GOSICK- 黒い死神と金糸の妖精-（仮）

サバ缶12号

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

＊必読推奨＊

桜庭一樹様の作品ＧＯＳＩＣＫの二次創作です。

アニメを見直しただけの原作読まずで基本アニメ設定で進めていきます。アニメのストーリーをなぞりつつ、ほぼオリジナルキャラと化した九条一弥にもっと頑張ってもらう話です。

こんなの私の知ってるＧＯＳＩＣＫじゃないと思ったりしたらブラウザバックを推奨しますです。

完全に作者の悪趣味で書いてるのでご注意下さい。

目次

第1話　はじまり ―――――― 1
第2話　僕はポエムで推理する ― 9
第3話　死神は箱庭に導かれる ― 20
第4話　妖精の心は何処にあるか
36

第1話　はじまり

時は１９２４年、春――――――――――――。

世界大戦終了から目覚ましい発展を繰り返す欧州ヨーロッパにて、フランス、スイス、イタリアの３国と海に四方を囲まれた小国ソヴュール王国。

その国のアルプス山脈の麓に建てられた聖マルグリット学園。貴族御用達の教育機関として名を轟かせる名門学園である。緑に囲まれ、市街地から鉄道で数時間の時間を要するこの名門学園に日本人である自分、九条一弥《くじょうかずや》が留学出来たのは、故郷である日本帝国にその成績を認められての事である。

故郷の姉は最後まで目から涙をポツポツと溢しながら見送ってくれた事は今でも覚えている。両親や他の兄達は立派な男になって帰ってこいと大きな期待をされて送り出されたのには少々参ってしまった自分がいる。

そんなこんなで家族からもお国からも期待されてやって来た新天地には、どんな物が待っているのかと逸る気持ちで胸を膨らませていたのだが、

「し、死神だっ、黒の死神が来たぞっ‼」
「うわぁ」「本当に髪も目も真っ黒だわ‼」
「きっと夜の国から来たんだ」
「全ての闇を吸い込んだような瞳に真っ黒な髪の毛、きっとお腹の中も真っ黒なのよ‼」

そう。日本人特有の黒い髪の毛、黒い眼、それがこの学園では、どうやら黒の死神だのと呼ばれる原因になってしまっているのだ。入学初日、職員室の教師たちには特に反応されなかったので、割り当てられた教室に入室した時と自己紹介の時は驚いた。皆がまるで妖怪か幽霊を見るかのような視線で自分を眺めてくる上に休み時間には誰も近づくのはおろか距離をとられる始末。少し動作するだけで周りから悲鳴を挙げられたのには少し傷ついた。放課後には全生徒の間で噂話が広まったのだろう。翌朝、教室のまでの廊下にいた生徒は自分を『黒の死神』と言いながら道を開ける様になっていた事にはもうお手上げと言う他にない。新天地に思いを馳せていた頃の己は、きっと草葉の陰で泣いていることだと思う。

ここまでの出来事が起きてから、いく数日が過ぎ、そんな友人0人な環境に慣れてくると言うこともなく半分呆れ、2割の悲しみと3割の開き直り加減で、歩きやすいから良いかなと思い始めた頃。

祖国から届いた兄直筆の便りには家族からの激励の言葉が載せられいた、此方に到着してから幾ばくもない内に手紙が届いたことから己が国を離れてから直ぐに送ったのであろう。笑顔で送り出してくれた皆（姉を除く）も恐らく心配してくれたのだと思う。

剛毅で豪放磊落を絵に描いたような男衆と其を支える我らが母上にはなんとも想像しづらい（笑）

はっ、背筋に悪寒がっ!?

兎も角、家族からの手紙を教室の自席にて読んでいたら、接近してくる茶色い影が接近してくるのに気付くのが遅れてしまった。

「怪談を読めば良いと思うのっ!!」

「おっと、とっ!!」

驚愕のあまりに落としかけた手紙を掴み、前を向く。目の前には大きな真ん丸眼鏡を掛けた茶色い波打つ髪が肩の辺りまで伸ばしている童女のような小柄な女性こそ、我等が組《クラス》担任教師であるセシル・ラフィット先生その人である。

取り敢えず、授業後、セシル先生に誘われるがままに着いていく。

「いい？九条君。この学園、いいえこの国ラヴュールには、怪談が沢山あってね♪
政治の世界にだってオカルト省って言うのがあるくらいに、皆オカルトが大好きでなのよ‼」
「では、僕が呼ばれている『黒い死神』って言うのもそのひとつなんですねセシル先生。」
「正しくは『春来る死神』。『黒い』は九条君の為に付けられた名誉ある冠かもね♪」

セシル先生の言葉に思わず苦笑せざるを得ない。
名誉と言うには少々周囲との認識がズれているとしか思えない発言を受け流しながら先生の話を聴く。

「何より‼皆との共通の話題があれば、お友達も沢山作れるし、１００人友達作って皆でアルプス山脈をピクニックしましょうっ‼」

大袈裟な動きで春の青空の下に聳えるアルプスの一角を指差して眼を耀かせながら此方を見てくる。
彼女の意見も最もであると思うが、学園全体に広まってしまっている現状を打開する手だてはあまりにも現実的ではないだろう。友人を作りたいとは思っているが、積極的

に動くのは裏目に出そうなので消極的かつ緩やかに浸透するように馴染めれば良いな位には程度の考えなので、先生には心の中で、検討しておきます、と言っておくことにしよう。最も、

この少し後には、前言撤回することになってしまったが、それは此の時の僕には分かるはずもないわけだが――――――――――

そんなこんなでセシル先生に案内されてきたのが図書館だった。それも只の図書館でなく、国でも有数の蔵書量を誇る大図書館らしいのはセシル先生談。

外側からの外観は、ピサの斜塔の様な円形の塔で扉は青銅色だが鋼鉄製で立派な装飾が施されている。塔の最上階らしき所はなんと温室らしく植物園になっているとの事。

とまぁなんとも、図書館にしては作りが立派だが、その巨大さ、蔵書量の多さと室内の薄暗さから学園の生徒や先生も近寄らないらしいが貴族からの寄稿本は絶えず押し寄せるらしく蔵書量は日々増加の一途を辿るらしい。じゃあ誰が管理しているのかと言う話を聴くのを忘れていたのは、先程まで目の前で興奮しながら熱意溢れる教育論を語ってくれた育成魂溢れる教師のお陰だと言い訳しておく。

「はぁ～…、確かに此は凄いな。」

驚きのあまりに思わず溜め息をつく。
扉を開けて中に入って直ぐエントランスがあり、奥に螺旋階段が見える、視界の両端に映る棚の高さに天井を見上げると、最上階らしきガラス窓が遥か頭上に見える。まるで馬鹿デカイ井戸の底に落ちたような気持ちになるようなそんな心地にさせる吹き抜けがあった。
吹き抜けの途中に橋を架けるのように存在している階段や天辺から降り注ぐ日光が非現実を感じさせるようだが嫌な感覚はしない。

「共通の話題、か。
怪談か…、取り敢えず探してみるか。」

沢山の本に囲まれると言う珍しい体験したお陰か他の生徒のように、この場所に薄気味悪さみたいなものは感じなかった。
案内板にしたがって、ソヴュール王国についての怪談話の載っていそうな本を探しに上に上がって、なんとなしに1冊の本を手に取ってみる。

「なになに、嵐の夜に浮上する幽霊船クイーンベリー号、死者の腸《はらわた》から金を産み出す錬金術師リヴァイアサン、どらもこれも物騒な感じだなぁ。
ん？これは、人の言語を解する頭脳明晰なる灰色狼、会話のできる狼か、動物と話せるのは面白そうだな。これなら仲良くなりたいな。
あれっ？これは？」

オカルトがかかれている本の間に挟まっていたのは、1本の金髪だった。1本だけであったが、何故だか女性を連想させ、視線は上に向けられた。どうしてか、この髪の毛の持ち主は天上の植物園にいる気がしてならないのだ。

「はっ、はっ、はっ、…。」

気が付いたら階段を駆け足で昇っていた。自分でもよくは分からないが駆けないと無くしてしまう気がしてならないのだ。
何が、何を、何で、分からないだらけだけど、急がなきゃいけない、そんな気がしてならない、故に駆け上がっているのだ。
果てしなく感じる階段を駆ける、駆ける、駆ける、息も絶え絶えになり腿が張ってき

て膝が震えてくる。

そして漸く辿り着いた最上階で僕は、【彼女】に出会った――

――

第２話　僕はポエムで推理する

昇り着いた最上階はとても明るく、そして鮮やかであった。欧州ではまず見られない南国の草花が最上階の端を固めるが欧州風の造りの建築との違和感は特に感じられず、天井から降り注ぐ日光の暖かさが壁や床に反射して温室特有のもりを作っている。太陽の恵みの素晴らしさを精一杯表現して魅せる様な温室の一角、階段を上って直ぐの広場に【彼女】は存在した。

まず目に入ったのは、椅子でなく直に座っている所為で床に広げられ日の光に反射するかのようにキラキラと輝きながら波打つ金の長髪、まつげの辺りで切り揃えられた長髪から覗く水晶の様なエメラルドの虹彩、そして等身大の見事なビスクドールの白い肌とバラの赤色が如き頬。【彼女】が身を包んでいる衣装がそんな人間離れした【彼女】にはとてもよく似合っていて、そんな【彼女】を囲むようにして開かれている本の一冊を読んでいるその姿を可能ならばこの少女を独占してずっと眺めていたいと思ってしまった。

故に完成された人形が如き【彼女】の口から老婆の如きしわがれた音が発せられたのに気後れしてしまい言葉が出なかったのは致し方の無い事だと思う。

「やっと来たのか。遅いぞ、『春来る死神』。」

【彼女】の口から流れる老婆の如きしわがれた声、外見と見合わぬその声音は１０人中１０人は違和感を感じるであろうその感覚を何故だか僕は感じる事が出来ずに居た。違和感を感じ取る事が何故出来ずに居るのかを考えようとしたところで【彼女】が自分の学園での異名を呟いたのに気づいた。

「どうして僕の異名を知っているのかな?」

と短く問い返してしまう。よく考えてみれば、【彼女】の年齢を鑑みるに誰か教師と接触して得ている情報かとも思ったが、半年間このような美少女を学園で見ることは一切無かったし、噂らしいものの1つも聞いた事が無かった。もっとも、友人の1人も居ない僕が何を言っているんだという話だが。

「銀の壺から立ち昇った未来は魔法の鏡に映し出される。占いによると君はまた此処を訪れるようだ、明日の昼の鐘を聞くころに。」

【彼女】のしわがれた声にて紡がれた不思議な予言らしいはすうっと僕の心に入り込むようにして嵌る。まるで最初から僕の心を構成していたかのように違和感無く嵌ったのだ。【彼女】が僕の予言をした事に対して疑問を投げかけてみた。

「なんで僕なのかな?」

すると【彼女】は持ち出した手鏡に触れながら、会話を始めてから一度も向けなかっ

たそのエメラルドの瞳を僕に向ける。
「君は選ばれたんだ。私の退屈を埋めるための欠片の１つに。」
傲岸不遜に傲慢に、まるで凡てを見通すかのごとく自信の篭った音と目線によって伝えられた。そんな【彼女】の宣言は、『あぁ、きっと予言は本当になるんだろうな』という予感を僕に感じさせるくらいには充分過ぎた。
きっと今日この邂逅と不思議な予言は、この先必ず面白い事を訪れると僕は確信した。そしてそれは彼女とともに居る事で成立すると。
ええとまずは名前を聞かなきゃ。
「ねえ、聞かせてくれないかな。僕は九条一弥、君の名前を教えてくれないか？」
【彼女】は不遜に答える。
「ヴィクトリカだ。」
【彼女】と言う呼び名は終わりだ。

翌日の授業の終わった後、セシル先生に昨日の出来事を話してみた。そもそも図書館のことを薦めてきたのは彼女だ。であるならば、彼女はヴィクトリカの事を知ってる上で僕の事を図書館に案内したのだ。それが何の目的なのか何かの思惑があるのかとか、そういうものはどうでも良いが、彼女には聞いておかずには居られなかった。

「セシル先生、昨日の事なのですが。」
「ああっ！もしかして九条君、彼女にあったのねっ！」
元気溌溂、活発、快活、セシル先生どうしてあなたはいつもそんなに全力で話しかけてくるんですか。前のめり過ぎて此方が後ろに倒れそうです。
「凄いじゃない九条君っ！ついにお友達が出来たのね！彼女、実はクラスメートなのよっ！教室にいつも席が1つ空いているでしょう？そこが彼女の席っ！」
知らなかった。件の席はいつも単なる数あまりで空いている物とばかりに思っていたから。
「そうだ！ちょうど良いわっ！彼女にプリントを持っていって！よろしくねー！」
そう言って彼女は僕に鈍器になりそうな量のプリントの束を押し付けて走り去っていったのを辟易しながら見届けていると、昼を告げる鐘が鳴った。

昨日とは違い、階段を駆け上がるのではなく緩々と上がっていくと、前回との様相の違いに再び言葉を失ってしまった。昨日見た美少女・ヴィクトリカがごろごろと転がりながら呻っていた、その姿を見守るようにしばらく眺めていたら、彼女が僕の足元まで転がってきたところでこちらに気付いたようで立ち上がりながら服をながら立ち上が

る。

「ようやく来たか、九条、君の到着が思ったより遅れていたので退屈していたところだ。」

どうやら恥じらう事もないようだ。

「ヴィクトリカ、昨日も思ったのだが君は占い師か何かなのかな？」

「何故？」

「僕が此処に来ることが予測できていたようだったからさ、なんとく気になったのでね。」

「黒髪の生徒がこの春からうろつくようになった。その見慣れぬ不吉な容姿からこの学園に伝わる春来たる死神を想起されることだろう。そして、九条、君のようなクソ真面目で融通の利かない秀才はきっと、その出典を調べるために此処を訪れるだろう、と。」

なんとも理路整然と僕が敬遠されるきっかけになった噂と僕自身の人柄から行動を予測したとのたまった。信じがたいという事にプラスして彼女が僕の人柄を何故把握しているのかとかイマイチ釈然としないことはあるにはあるが、それは今追求すべきでない、と頭の中の姉が囁いたので一先ず置いておこう。

そんな会話をしていると、温室の置くから機械の動作音が聞こえてきた。昨日はヴィクトリカに意識を割いていた所為か気付く事が無かったが、どうやら此処にはエレベーターが設置されているようだった。エレベーターがまで上がってくると中に１人の人

影が確認できた。扉が開いて中の人物が日の当たる所に出てくると、
「ス、スゴイ…、なんて前衛的かつ独創的な髪型なんだっ！天を衝くかのようなフォルム！」
リーゼントとドリルを併せた奇妙な髪型だった。
「グレヴィールか。」
「知っているのかい？」
リーゼントな彼は、歩きながらこちらに話しかけてくる。
「やぁ、今日はいい陽気じゃないか黒い頭の子リス君。こんないい天気の日には長いポエムを口ずさんでみようかな、聞いてくれるかね？子リス君」
どうやら彼が話しかけているのは僕のようだ。ヴィクトリカが彼を知っている事から恐らく知り合い若しくは、個人的に目の前の彼がヴィクトリカの、信じられないが兄妹かもしれない可能性も無きしも非ずなわけで。取り敢えず、彼がこのまま話すというなら聞いてみよう。
「昨夜、ある村の屋敷にて老婆の占い師ロクサーヌが殺害された。占い師は、屋敷にインド人の下男、アラブ人のメイドと3人で住んでいた。其処に占い師の孫娘が訪ねて来た晩に事件は起こった。」
「何故下男がインド人でメイドがアラブ人なのだ？」

ヴィクトリカが聞いた通り、屋敷の人間の国種がバラバラなのは少し気になったが共通語があるなら問題ないように思えた。
「異国情緒のある使用人が好きだった占い師はヒンドゥー語やアラビア語も日常会話くらい出来る。あぁっ！メイドはアラビア語しか分からないようだが。」
これは少し変な話だと感じた。いくら異国情緒があるからといってソレは少々情緒がないだろうと少し引っかかりを覚えた。
ところでこのグレヴィールと言った彼は欧州人特有のただでさえ大きな身体を大袈裟な動きをしながら事件の説明を語ってくれている。だが話しかける際にちょこちょこ僕の後ろに見えるだろうヴィクトリカを見据えている事が分かる。
「もしかして彼は刑事さんだったりするのかな？」
「彼はグレヴィール・ド・ブロワ警部殿だ。ソヴュールではそれなりに名の知れた奇妙な髪形を持つ名刑事殿だ。」
彼・グレヴィールのことをヴィクトリカに聞いてみるとそんな答えが返ってきた。その際の彼の渋い顔を見るにどうやら好きでこの髪型にしているワケでない事とそのワケを彼女は知っているらしい事は分かった。
「占い師は事件直前、自室で寛いでいた。インド人の下男はその部屋の窓の外で庭に放していた野うさぎを飼育籠に戻していた。」

「野うさぎか。」
ヴィクトリカは呟きながら、頭の中でピースを当てはめているようだ。グレヴィールの話はなおも続く。
「この占い師はたくさんの野うさぎを飼っていた。ときどき猟犬に食い殺させていたらしい。」
彼の顔に少し影が入る、その事から彼は野うさぎを食い殺させる事にあまりいい思いはしない人柄だと言う事は伝わった。
「あぁつと！話を戻そう無垢な子リスよ。その夜、銃声が鳴り響き、皆が驚いて屋敷の廊下に集まった。ドアには鍵が掛かっていた。メイドが何かを語りかけながらドアを叩いたが答えは返って来ず、インド人の下男がドアを斧で壊そうと提案したが、孫娘が反対した。婆さんが死んだら自分の物になると言う、罰当たりな理由だ。だが、メイドは孫娘の言葉が解からなかった為、隣の自室から拳銃を持ってくるとドアの鍵穴に目掛けて発砲した。そしてドアを開けるとそこには、左目を撃ち抜かれた占い師が、窓は内側から鍵が掛けれていた完全な密室だった。」
そこで、言葉を切って此方に指を突き付けながら彼は自信満々に言い放った。
「さぁ、子リスよ！お前ならばどんな答えを出すだろう？」
彼の目は、お前なんかには解けまい！、そんな挑戦されているような気がしたので返

してやった。
「僕はこの謎についての仮説を思いつきました。」
「なにぃ!?」
そこで彼女の、ヴィクトリカの胡乱下な欠伸が聞こえてくる。彼女のほうを向いてみる
と本当に退屈なようだ。ただその様子は事件の様子を聞いている途中には見られなかったものからして犯人が分かった途端にと言う事なのだろう。彼女は眠たげにを咥えながら宣言する。
「ふわぁ〜あ、なんだそんな事か。の欠片は凡て揃った。此処で再構成してやろう。」
その台詞が出た瞬間、彼・グレヴィールの視線が鋭くなったのを肌で感じた。
ただそれも彼女の次の言葉で空気が抜けた。
「しかしその前に、子リス君こと九条、君の仮説を聴かせてみたまえ。」
傲岸に不遜に彼女は言い放つ。予想外だが、彼・グレヴィールはニヤニヤしながら此方を見て。
「ほう、確かに私も子リス君の仮説、とやらには少しだけだが気になったのでね。よければ聞かせてくれるかな?君の言うその仮設を。」

この人、絶対僕のこと信じていないだろう。間違いがあったら、絶対馬鹿にしてくるに違いない、そう確信を持った。

「こほん、ええとでは仮説の説明の前にグレヴィール警部に2点ほど質問いいですか?」

質問する事は予想外だったのだろう。一応ヴィクトリカにも聴いてみる。

「質問するのはいいかなヴィクトリカ?」

彼女はやはり眠たげにキセルを咥えながら、肯定の頷きを返してくる。それに合わせてグレヴィールもＯＫを出してくる。

「うむ、いいだろう。許可する。」

本来なら全く関係が無いであろう僕が２人から許可が出た事にホッとする、何故だ！

「では、１つ目は老婆の死んでいた位置がドアからどの程度の距離だったのかを、２つ目は窓には本当に損傷が無く鍵が掛かっていたのか、この2点です。」

グラヴィールは質問の意味を考えながら聞いていたのか、顎に手を当てながら真面目に答えてくる。

話によると老婆はドアからおよそ2メートルほどの距離で車椅子の上で死んでいたとのこと、そして窓には何も無く鍵が掛かっていたのは確かな事。この事を踏まえて結論がより真実に近づいた事を確信する。

「今、警部から話が確かならば犯人はアラブ人のメイドです。」

僕はしたり顔でそう言った。

第3話　死神は箱庭に導かれる

「犯人はメイドだ」と、得意げに言い放ったことに対し、僕は後に羞恥心を感じてごろごろと床を転がりながら悶絶するのだが、その事をこの時の僕が解かる筈も無く。

「じゃあ僕の事件に対する仮説の説明させていただくと、まずアラブ人のメイドの言葉が理解できるのは殺害された占い師本人だけであると言う事、メイドは最初ドアを叩きながらアラビア語で何かを叫び、それから自分の部屋から拳銃を持ってきて鍵穴目掛けて発砲した。これは事実で間違いは無いでしょうか？」

グラヴィールは大仰に頷いて肯定の旨を返す。

「メイドはその時に何を叫んでいたのでしょうか？これは僕の予想ですが、恐らくメイドはこう言っていたのでしょう。『ご主人様は命を狙われています。先ほどの銃声は聞こえたでしょう。窓の傍から離れてドアの近くにいらして下さい。』と。」

彼・グレヴィールは首を傾げながら先を促すように告げる。

「それは、つまり？」

「アラブ人のメイドは占い師がその時点でまだ生きていた事を知っていたのです。アラビア語で占い師を騙し、安全だからとドアの前に誘導し、鍵ごと占い師を撃った。左目

に当たっていたのは恐らく占い師が車椅子に乗った状態で鍵穴から廊下を覗こうとしたからでしょう。撃たれた反動で車椅子は緩やかにドアから後退したことが伺えます。」

グレヴィールには予想外の事実だったのだろう、次に彼は当然気になっていた疑問を投げかけてくる。

「まてまてっ!?では、３人が聞いていたという1発目の発砲音は一体なんだったというのかね？」

「それは恐らく占い師の隣の部屋で撃った物と思われます。屋敷の住人を呼び寄せるために、他の２人はその発砲音を占い師を撃った物と勘違いしたことでしょう。調べてみればどこかに真新しい銃創が出来ているはずです。」

そこで一度言葉を切って、静聴してくれていた２人の方に向き佇まいを正す。

「どうでしょう。何か間違っている、若しくは、間違っていそうな点はあったでしょうか？無ければこれにて仮設の披露は終了とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。」

ヴィクトリカは煙管を加えながら、グレヴィールはやはり顎に手を当て考える素振を見せながら、『何か間違いとかあって指摘されたら怖いなぁ』とドギマギしていると、そこでグレヴィールは僕に向かって、顔を振ってヴィクトリカに直接聞けと言うサインら

しき物を送りつけてくる。彼はどうやら僕の説明だけでは信じ切れず納得がいかない様だった。いつまでも感想無しでは僕も少し物悲しいので彼女の声で事実の成否を紡いでもらう事にした。

「ヴィクトリカ、君は僕のこの説明正しいか間違ってるかの採点を聞かせて欲しいのだけど、どうかな?」

不躾に、図々しくならない様に当たり障りの無い様に聴いてみる。

「そうだな九条、君の説明が概ね正確だった事を加味して評価は特別にAをやろう。喜べ君の説明に間違いは無かった。」

ヴィクトリカは微笑みながら僕の説明を評価してくれた。なんと!不遜なりし彼女からお褒めの言葉を貰うなんて!かなりの驚きに僕が若干の驚きを見せる。すると彼女はまたあくびをして眠たげに目蓋を下げ、目を半眼にする。すると彼女のそんな発言に漸く納得がいったのか、もう此処には用無しと言わんばかりに伸びをしながら此方に背を向ける。

「な~るほど!ん、納得がいったところでそろそろ署に戻らんとな、いやぁ良い気分転換になった感謝するよ子リス君!」

最後にヴィクトリカに念押しされるまで僕の説明を信じていなかった人物のまるで感謝の念が篭っていない礼をされても苦笑する事しか出来ない。と、彼がエレベーター

に乗ったところでヴィクトリカが音を紡ぐ。
「犯人の動機についてだが。」
　僕は彼女の発言に驚愕せざるを得ない。僕の仮説ではメイドの動機についてははっきりとした事は言えなかったので明言しなかったのだが、彼女の頭脳では明確にソレを捕らえているようだった。グレヴィールが話を詳しく話を聞こうとするが、その前にエレベーターのシャッターが閉まってしまう。彼女、この瞬間を狙ったのはわざとかな？
「んんっ!?なにぃ!?」
「彼女が１発目の発砲で何を撃ったのかに隠されているはずだよ。」
「どういうことだ!?うわぁぁ!?ちょっと待てぇぇ!?」
　断末魔の如く彼の声が最上階に響きながら下へ下へと遠のいていく。その様はなんとも哀れに思える、先ほどの僕の扱いに対しての文句を言うならざまぁみろと言ったところだ。
　グレヴィールの断末魔が完全に途絶えたところでヴィクトリカは煙管から口を離して大きなあくびをして退屈そうな様子で呟く。
「ふわぁぁあ、一瞬で終わってしまった上に言語化する前にほとんど終わってしまった。また退屈に戻ってしまったぁ～、うぁ～ん。」ゴロゴロ
　そう言いながら、『退屈～』のあたりで、既に今日最初に会った時のようにゴロゴロと

床を転がり始めてしまった。なんとも躁鬱の落差が妙な少女だと思う。だがこのゴロゴロしている姿にはなんとも惹きつけられる魅力がある！

そう！まるで心がぴょんぴょんするようなそんな感じが……、ハッ!?

今意識が若干飛びかけていた。この僕の鉄の如き精神力を氷のように溶かしてしまう魅力を持った少女ヴィクトリカなんて恐ろしい子っ!?

と、頭の中で妙な抗争を繰り返していると、いつの間にかゴロゴロするのを止めて此方をその眠たげな半眼で見上げるように見つめているヴィクトリカと眼が合ってしまい妙に気まづくなってしまったので、彼女に気になっていたことを聞いてみる。

「それで、君は一体何者なんだい？先ほどの警部殿も君のことを頼りにしている、と言うよりかは気にしているようだったし。」

彼女は身体を起こし煙管片手に胡乱げに回答する。

「私の事が知りたいならば、この場で踊れ。」

この彼女の無慈悲な要求に頭の中をさせながらも取り敢えず頑張って覚えた阿波踊りを披露したにも拘らず『つまらん。』の一言で一蹴されてしまった事については涙ながらに異議申し立てをしてもいいはずだと思う。

日付が変わって翌日の朝、寮の食堂にて寮生でもある僕がいつものように周囲の寮生

から物理的に距離を置かれつつ、昨日彼女を楽しませる事が出来なかったので次は彼女を持ち上げて、あの低身長では普段見る事の出来ない高さの目線を味あわせてあげるために『高い高い作戦』を考えていた時のこと。

「昨日は唐突なだった故に不覚をとったが、次こそはヴィクトリカの楽しげな気持ちにさせられるように何か策を考えねば、……。」ブツブツ

「おはよう、九条君。朝ごはんきちんと食べてるかい？」

話しかけて来たのは、この学園寮の寮母さんで九条達寮生が大変お世話になっている赤毛の女性で名をソフィさんである。彼女はよく読み終わった新聞をくれたりするが、かわりに九条によくお使いなんかを要求してくるさっぱりした性格である。

「大丈夫ですよ。少し考え事を、していた、だけ、ですよ？」

自分でも変なしゃべり方になってしまったが、立ち上がりながらソフィさんの腕に布巾と共に掛けられていた新聞のある記事に目線が引き付けられた。ソフィさんが少し驚きながら心配そうに事情を聞いてくるが、一先ずたいしたことではないと話をはぐらかしつつ、譲ってもらった新聞の記事を読む。なんで心配そうにしてたんだろう？

「なになに、『またしてもお手柄ブロワ警部！占い師ロクサーヌ射殺事件を解決！孫娘からは感謝のキスとヨットを送られる！』と、これはまたなんとも。」

新聞の一面にはグラヴィール警部と彼に抱きついて頬にキスをしている孫娘とが掲

載されていた。
　その記事を読んでいて、昨日の出来事を頭の中で思い出しながら整理してみる。２人の昨日の植物園でのやり取りは通例化されたものが感じられたので、この犯人を特定して逮捕した手柄は、彼女・ヴィクトリカは興味が無い物らしいのは昨日の謎解きが終わった時点で雰囲気がガラッと変わった事で、なんとなく、彼女は謎解きの類にしか興味が無いのだろうことは察知していた。
　だが、この事件解決の成果を彼が手にする事に関しては話は別だ。何故ならばこの事件の概要は僕が説明をしたわけだからだ、確かに彼女に正否を聞いたがこの事件は僕も功労者である事は間違いないはずだ。なに、別に手柄を横取りされた事に怒りだとかを感じているわけではなくて、この事件で彼が得た報酬を僕の考えている計画に利用させてもらっても構わないんじゃないかな?、ただそう思っただけ事なのだ。
　ちなみにこの時の考え事に耽っていた彼・九条の顔はソフィさんだけでなく周りの学生たちにしっかり見られていて、何か悪さを働こうとしているんじゃないかと警戒されるのだが、いつも距離を取られている九条には分かるわけが無かった。

「それで私に話があるとは一体どういうことかね?」
　放課後に警察署を尋ねてブロワ警部の知り合いです。と伝えると、思ったよりあっさ

り彼のオフィスに通された。彼はどうやらデスクワークをこなしていたようで机の上の書類をどかしながら声を掛けてきた。
「今朝の新聞の記事を見て驚いたのと、グレヴィール警部に少し話を聴きたいなと思ったのでこうして尋ねてきたんですよ。」
　表面上は親族の感謝の念やお礼の意味を含めたヨットの贈与についての話をする。勿論僕が考えているヴィクトリカに対する計画には触れずに話す。僕が最終的に要求したいのはヨットの利用権だからだ。彼も最初は、キスは向こうが無理やりして来たのだぞ等はぐらかしていたが、ヴィクトリカの推理や昨日の件は僕の説明がほとんどだった事を話していくと苦虫を噛み潰したような顔つきになっていき、最後は溜息をつきながら承諾し。
「わかったわかった！君のその情熱には参った。週末に予定しているヨット遊びに君たちも是非来てくれ。」
「ありがとうございます！ところでヴィクトリカの外出許可には警部の特令がなければならないと彼女の担当教諭から伺ったのですが。」
　ヴィクトリカの担当教諭とは、ずばりセシル先生のことである。やはり彼女はじめから友達がいない僕にヴィクトリカと友人関係になってほしい為に大図書館に誘導したらしい。実はあの先生かなり腹黒かったりするのだろうか？駄目だ、天然ドジな所が多

すぎて判別が難しい。
「そうなのだ！ヴィクトリカの外出許可の特令は私の働きかけが無ければ通らないのだよ。もっと感謝して欲しい物だよ君！では、来週の週末にまた会おう！」
そう言って、彼は足早に退出を促してくる。あまり理由について触れられたくないだろう。だが、どうにも外出許可申請が通るには警部殿の力が無ければ不可能と言うのは事実らしいしその事実には淋しさと悲しさがあるが、とにかく今回彼女を外に連れ出せるきっかけを作れた事を今は純粋に喜びたいと思う。

「それで君は私に週末のヨット遊びに参加できる旨を伝えに来た、と。」
植物園にて此処までの経緯を彼女・ヴィクトリカに説明した。
「うん。グレヴィールさんが解決した事になっている今回の事件の話は一応僕も携わった事を話したら、快く誘ってくれたからね。ついでにヴィクトリカも一緒に行こうという話をね。」
ヴィクトリカは表現しづらい表情で床に広げられた本から顔を上げると僕に対して苦言を述べる。
「九条、君ね、それは一般的には恐喝、脅しと言う行為だよそれは。とにかく、貴重な週末をだね。グレヴィールと共に過ごしてだね、君楽しいのかね？」

「グレヴィールさんと一緒にヨットの操作をしたり海の上で食事をするのは、それなりに楽しそうだけどね！どうせならヴィクトリカ、君も一緒に海を見ようじゃないか！と言う事で誘ってみたのだけれど駄目、かな。」

男同士で一緒に汗をかけば少しは今回少し強要したこともまぎれるかな、なんていう打算的な考えもあったりするのは確かだ。

「私としては、男同士の友情など正直見るだけで暑苦しくなるので遠慮したくもあるが、」

彼女は一度言葉を区切り、天井を見上げながら、壁の向こうの外の世界に想いを馳せる。

空を見上げるようなヴィクトリカの視線は、ここじゃない外の世界を透過して見ているのだと、そんな風に僕には感じられた。

「そうか、では、出られるのか…、この牢獄を…。」

彼女は呟きから少し間をおいて、すくっと立ち上がった。

「では、旅行の用意をしなくてはな。」

旅行の日にちまでまだ数日の余裕があり準備をするには若干早すぎるようにも感じて声をかけようと思ったが彼女の表情を見て止めた。彼女は、まるで翌日の遠足が楽しみで眠れない子供のようにそのエメラルドの瞳を爛々と輝かせ、スカートを軽く持ち上

げ駆け足体勢に入っていたのであった。先ほどのような冷静にそのしわがれた音を紡いでいた彼女が、背の高さ相応の少女のように興奮を抑えきれずに居る様は僕の庇護欲を刺激する。僕はヴィクトリカの愛らしさに悶絶しそうになるのを鉄の精神と鋼の表情筋によって表面に出ないようにして彼女の荷造りを手伝おうかと声をかけると、一度冷静に戻った彼女はほんの少し頬を赤らめながら、

「ほう、の旅支度を覗き見ようだなんて、九条、君は案外紳士ではないのかね。」

と言われたので、渋々引き下がらざるを得なかった。非常に残念だった。

ヨットで一泊海の旅の当日の朝、ヴィクトリカとあらかじめ決めておいた集合場所に少し早めに向かう事を決めた。理由は特に無い、ただなんとなく、ヴィクトリカが旅支度を勘違いしている気がしたので早めにストップを掛けられたら位の気持ちで集合場所に向かうと、案の定、彼女がその小さな身体で一生懸命トランクを引っ張っている姿が確認できた。その懸命な姿には心打たれるが、彼女が持っていくつもりの荷物のすべてを聞いてみるとそうしてはいられなかった。ヴィクトリカに、旅支度の何たるかを説いた後、彼女と荷物の選定についての討論していたら汽車の時間が差し迫ってきたので、トランクケースとヴィクトリカを抱えて飛び乗るように汽車駆け込む羽目になってしまった。ちなみに携帯食料とお菓子、それと本は『これはだな知恵の泉が導き出した

最低限必要な装備だ』と言い出したが、最終的には僕にも少し分けてくれる事を条件に荷物に加える事で凡その決着と相成った。

「うわぁ。」

「もうさっきの出来事は大丈夫そうかな。」

そうなのだ。汽車が走り出すまでは、荷物の選定についての話に不満たらたらだったのだが、汽車が走り出してからのヴィクトリカは、次々と変わる外の景色に徐々に釘付けとなって行き今では此方は一切向かず、窓の外を無言で眺め続けているのだ。

そうして変化していく景色に合わせてその喜びの表情をコロコロと変える彼女は傍から見ていても絵になっていて、そんな彼女に引き寄せれてつい頬に指を指してしまったのは仕方が無かったと言い訳させて欲しい。

「何を、しているのかね？」

ヴィクトリカの機嫌を損ねてしまったかと思ったが、純粋に疑問なだけのようだった事にホッとしながら言い訳をする。

「あ、あぁ、僕の祖国にこういう遊びがあって、…。」

変なヤツみたいな認定を受けてしまったかもしれないが、この場を誤魔化し、乗り切れたことには一先ず安心した。

目的地の駅を出て直ぐ、ヴィクトリカは逸る気持ちを抑え切れなかったのだろう。街

並みを見て感嘆の溜息をついて、アイスクリーム屋や新聞売りの屋台なんかの建物を指差し色々と質問攻めにされた。やはり外に出た事が本当に少ないのだろう、馬車を呼び止めた際にも世間知らず爆発は止まらなかったのには思わず、笑ってしまったら馬車の中で脛を蹴り上げられてしまったが、彼女との距離が少し縮まった気がしたので結果オーライとする。

「やぁっ!・相棒っ!・どうだ決まっているかい。テーマは海の男だよ!」

水兵服にてヨットの上で陽気に迎えてくれたのは我らがグレヴィール警部殿だ。彼のはじめの台詞を聞いても分かる通り、休日気分を全力で楽しむ気で一杯のようである事が伺える。彼は、こちらのゲンナリした雰囲気を察知したのか話を進める。

「そうそう、例の事件なのだがね、隣の部屋での1発目の発砲で撃たれていたのは、鏡だったよ。」

「成る程、魔法の鏡か。」

今日どこかの機会があったら聞いてみようと思っていた事件の内容。だが、犯人の動機である1発目の発砲で撃たれていたのが鏡だったと知らされてもイマイチ繋がりが読めずにいた。ヴィクトリカは何かに結びついたようだけど。

「それからアラブ人のメイドなのだが、美人だ。」

この変な頭をした変人警部は何を言っているんだろうと本気で思った瞬間だったり

する。
　咳払い。
「こほん。そのメイドが取り調べで謎の言葉を口走った、『これは箱の復讐です』と。」
『『箱の復讐』、ふむ。」
『箱の復讐』、僕がその言葉にイマイチピンと来ないでいるに反して、ヴィクトリカは煙管を咥えたことから知恵の泉で思考を巡らしているのだろう事が分かった。
　僕も少し考えてみる。殺された老婆は占い師で庭には猟犬と沢山の野ウサギを飼っていて時々、猟犬に食い殺させていた。恐らくは、占いの手法の１つだったのだろう。でも、箱って何の事だろう？駄目だな、僕ではまだ情報が足りないみたいだ。ヴィクトリカはもう分かったのかな、とそこまで考えてヴィクトリカの方を向いた時だった。
「警部っ！警部殿っ！ブロワ警部っ！アラブ人のメイドが脱走しました！」
　警官の１人が走って、大急ぎと言った様子で声を張り上げてくる。
「な、なんだってっ!?本当かっ!?」
　グレヴィールはこうしてはいられないとばかりにヨットから飛び降り、
「おい九条君！私はこれで失礼する！ヨットだが、乗ってもいいが運転してはいかんぞ！我慢だっ！我慢！」
「了解です！お仕事頑張ってください！」

取り敢えず、従っておくべきだろうなと思った。当然ながら僕みたいな子供1人だけで動かせるわけでもないし、ここはヴィクトリカと2人になれた事を喜ぶべきだろう。
「どうする？グレヴィールさん、言っちゃったけど、ってあれ？ヴィクトリカ？」
ふと横を見るといつの間にかヴィクトリカは姿を消していた。辺りを見回してからヨットの室内を確認すると彼女は何やら物色していた。
「おーい、あ、いたいた！どうしたんだいヴィクトリカ？」
「君、このヨットは占い師ロクサーヌの持ち物だったな。」
「ああ。」
「招待状のようだロクサーヌ宛の。読んでみたまえ。」
そう言って彼女は一通の既に開けられた封蝋の便りを渡してくる。手紙に視線落とす直前視界の端でヴィクトリカが煙管を咥えたのが見えた。そして彼女に言われるがままに中の文章を目で追う。
「いいけど、この近くの海岸に停泊中の豪華客船でのディナーへのご招待、箱庭の夕べってこれは！『メインディッシュは野ウサギです。』って」
僕が手紙の内容に驚きを見せ顔を上げるとヴィクトリカも首肯して返してくる。
「占い師は野ウサギを飼っていた、そして箱庭の夕べという名とメイドの言う箱庭の復讐。」

この招待の手紙と今回の事件が一本の線で?がったことが感覚で分かった。僕は少し間を空けてヴィクトリカに話しかける。
「どちらも『箱』、だよね、…どうしようか。」
「君はどうしたい。」
彼女は、此方の意志が分かっているような、凡てを見通すエメラルドに輝く瞳で僕を射抜く。
「行ってみようか！」
「それでこそ『死神』だ。」
彼女と僕は手紙の通り港に停泊していた豪華客船を見つけ２人で乗り込むことを決めた。船に乗り込むための橋を上がっている時、僕は彼女・ヴィクトリカと出会った日の事を思い出していた。彼女はきっと面白い事に僕を巡り合わせてくれると予感していたが、こんなにも早く訪れるとは思いもしなかった、その事に感謝しても仕切れない。だが、彼女に対する認識に於いて僕自身でも把握できていない感情については不安が残るが、それよりも目の前の冒険に注目するとしよう。
この最初の冒険から僕と彼女の運命は坂を転がる石ころのように数々の事件と関わりを持つ事になるのだけど、まぁこの時の自意識過剰で妙に自信家臭い未熟な僕には分かるわけが無いよね。

第４話　妖精の心は何処にあるか

　占い師ロクサーヌの遺したヨットから見つけた。野ウサギディナーの招待状に導かれるままに近くの港に停泊していた豪華客船へと乗り込んだ僕とヴィクトリカは、入ってすぐに係りの人に案内され食堂に通された。案内された食堂は、薄暗く、その光源は部屋の端にある光量の低い橙色の明かりとディナーの用意がされている長机の上に置かれている蝋燭の火位だ。室内では、既に食事が行われているらしくお皿とナイフやフォークなどの食器が接触する音が聞こえ、また座席がすべて埋まっていることから僕らが最後の招待客であろう事がわかった。だが、この暗さで、少し隣席との距離が空いている為に隣席に着いてる他の招待客の顔を伺う事は少々困難であった。精々人影がいくつ薄暗い室内で動いているか程度が分かるだけだった。
　と、僕が室内を見回しているうちにヴィクトリカがちゃっかり空いている最後の座席、本来生きていたら占い師の老婆が着席するはずだった場所を陣取って準備されていた食事に手をつけようとする所が目に映った。
「ちょっと!ヴィクトリカ、1人だけ先に席に着くだなんてずるいと思わないか?」
　一先ず、先ほどから手に持っているトランクケースが重たいので、ヴィクトリカが

座っている座席の横に置きながら、彼女に話しかける。すると彼女は、ステーキのお肉を丁寧に切り分け口に運びながら憮然とした様子で回答してくる。

「我々は、ロクサーヌ宛の招待状で此処を訪れたわけだからな、当然、座席もディナーも１人分しかない。」

ヴィクトリカの視線は目の前のお肉に固定された状態で僕との会話を成立させている、お肉料理がよほど口にあったのか、パクパクと軽快に食事を進めている。咀嚼の為に上下させている様子がなんとも微笑ましい。しかし困ったな、座席が無い事については少々不満を洩らしたいが、それはイレギュラーな招待客である僕らには対応しろと言うのが無茶な話である。仕方無しと割り切ってしまう事にして、残った問題は食事かな。

「僕だって、此処まで君の荷物が詰まった、それなりに重量のあるトランクケースを運んで来たので若干空腹を感じているんだ。ソレに対して、パンの１つ分ほどでも報われても良いじゃないかなと僕は思うのだけれど。」

ヴィクトリカは、口をナプキンで拭いながら応えてくれる。

「私が君と議論を交わして削られていった必要最低限だと考えられた道具たちの内、君と折半する事で目出度く荷物入りを果たした非常食があった筈だな。まぁ、体格が小さくても君も男の子なのでもの足りないだろう、ほら。」

そう言って、僕の労働の対価になったロールパンを手渡してくれる。
彼女の荷物分けに際して議論による譲歩などせずに問答無用に仕分けていたら、きっとこの時の彼女は烈火の如く攻めて来ただろうな、と彼女が渡してきたパンを齧りながら、別の在ったかもしれない未来を夢想していたら少し背筋が冷たくなってしまった。
「あ、このパン、意外と美味しいかも。」
僕はそのあと、ヴィクトリカと言葉を交わしながら室内の他の招待客であろう人影に気を配っていたのだが、ヴィクトリカが夢の国への船を漕ぎ始めた辺りで、僕自身も次第に視界がぼやけて行き、そのまま周りの薄暗さに溶け込むように意識が薄れていった。

「おい君、仕切り屋で屁理屈こきの留学生の人。さっさと起きたまえ。」
次に僕の意識が覚醒したのは、目蓋を開けた先の視界が知らない天井とヴィクトリカを映し出した時だった。起き上がって周りの状況を確認すると、僕とヴィクトリカ、その他の招待客全員が先ほどの食事に混入されていたであろう眠り薬によって眠らされている間に別の部屋（ゲストルームだろうか?）に運び込まれ、今全員が目を覚ましたところのようだ。
「うぅん…。ここはどこだい?」

寝起きによくある余韻を振り払うように頭を振って眠気を飛ばそうとする。どうやら僕が寝かされていたのはソファの上だったようだ。彼女・ヴィクトリカは淡々と事実を伝えてくる。

「どうやら先ほどの食事に眠り薬が一服盛られていたようだ。目が覚めたら全員このラウンジに移されていた。」

僕は状況の理解に勤めようとしたところで、覚えのある臭いを感じ取るがそれが何の臭いなのかは思い出せないので一先ず保留にし、他の招待客を見回しながら、ようやく覚めてきた頭で現状を把握する。他の乗客たちも目が覚めてきたようで徐々に困惑し始める。

「あ、開かないっ!?もうっ!どうなっているのよっ、この船は!?」

赤いパーティドレスに身を包んでいた黒髪を腰近くまで伸ばした女性がこの部屋の扉をガチャガチャと鳴らしながら叫び声を上げ、扉から離れつつ上機嫌とは言いがたい様子で室内の方に戻ってくる。その際にポーチを振り回し余所見をしながら歩いてきて丁度通路のようになっている僕が座っている横を通ったとき、たまたまだろう、僕の頭に直撃しそうになったポーチを手で遮った。彼女は当然、ポーチが何かに引っ掛かったことに気づいたのだろう、此方に振り向いてくる。

「何よ。の持ち物に気安く触れないでくれるっ!」

ドレスの彼女を刺激しないように諭す事に勤めるとする。僕は彼女のポーチから手を離す。

「申し訳ありません。貴女の持ち物が僕にぶつかってしまうところだったので思わず受け止めてしまいました。」

「そう。こちらこそ、悪かったわね。」

そう言ってドレスの彼女はバツが悪そうにして一言謝罪をすると早足に僕らから離れていった。頭部への事故を防いだ僕がソファに座りなおしたところでヴィクトリカが話しかけてくる。

「九条、可笑しなことがある。先ほどまで食堂には9人の人間がいた、我々を含めて11人だ。しかし、今この部屋には12人いる。」

僕は立ち上がって今この室内にいる人数を数えてみると確かに増えている。

「恐らくは食堂にいなかった人間が1人この中に紛れ込んだものと思われる?」

ヴィクトリカは僕の意見に頷きで返してくれる。

「眠ってしまった我々をこの部屋に運び込んだのも恐らくはその人物だろう。」

彼女の話から、その紛れ込んだ人間は一体何の意図があっての行動なのだろうか?そのことについてヴィクトリカに聞こうとしたところで他の乗客達の会話が聞こえてきた。

「では、やはりここは箱庭の…。」
「どうやら、そのようだな。」
「では、野ウサギはあの子供たちか？」
　部屋の隅の方で壮年の紳士が３人でこそこそ話している内容が部分的に耳に入ってくる。
　耳に入ってきた情報を整理していると部屋の奥の暖炉の上に安置されいる船の模型が目に入る。それは、今現在搭乗している豪華客船の模型だと思われる。よく出来ているな、と思い近寄って触れようと手を伸ばしたところ、
「それに手を触れるなっ!!」
　先ほどの会話をしていた内の１人が血相を抱えた様子で声を張り上げたようだ、その静止を呼びかける声に振り返ろうとしたところで、僕のこめかみ付近を掠るようにして船の模型の上辺りに矢が突き刺さり周囲がどよめいた。
　自分が寸でのところで生命の危機を脱した事に頭が追いついたこと自分でも解かる位に顔の血の気が引いていったのが分かった。
　少年が発動させてしまった致死性のトラップを確認すると此方に視線向けていた壮年の紳士たち得心が行ったと口々に洩らす。
「やはりこの船っ!?」

「あ、ああ」
「間違いない」
ヴィクトリカが数瞬置いて駆け寄りながら安否を聞く。
「大丈夫か、九条？」
彼女のしわがれた声を聴いて、我に返ったことで血の気が顔に戻ってくると僕は彼女に今しがたの出来事で思い出したことを彼女に告げる。
「思い出した。この船の模型を見て、どこか既視感を感じていたんだ。それが漸く分かったよ。」
ヴィクトリカはこちらが続けるの促す。
「君と出会った日にあの大図書館で読んでいた怪談話の内容だ。１０年前に沈んだ筈の船、幽霊船クイーンベリー号、死者の魂は浮かばれず嵐の夜になると生者を呼び寄せ生贄として沈める。と、確かそんな内容だった。」
僕が彼女と出会う際、図書館でセシル先生の勧めで怪談話を探していたときの事だったか、そんな怪談話を見つけた。その情報を聞いて、何か考え込むようにヴィクトリカが呟いた次の瞬間だった。
「１０年前…、ッ！」
室内の証明が落とされ目の前が闇に包まれた。そのとき他の乗客たちは困惑と動揺

で大声を上げたりしながら何が起こったのかとうろたえている様だった。当然だ、食事に盛られた眠り薬、知らぬ間に運ばれた我々、犯人の思惑がどうであれ警戒せずにはいられないだろう。

僕は、次に何が起こっても庇えるようにヴィクトリカが居た場所に手を伸ばし抱き寄せる。

「ヴィクトリカッ!!」

「九条っ!?わぷっ!!」

どうやら彼女を掴む事が出来たようでその事にホッとしたところで唐突に引き寄せたことを弁明し始めるべきだろう。

「次に何が起こるか判らないからね。知っている人同士で近くに居たほうが安全だと思ったんだ。いきなりだったけど大丈夫?」

周りを暗闇に囲まれ、引き寄せた腕の中で何となくだが彼女が返事を返そうとするのが伝わってきて、明かりを探す声が響き渡り他の皆の混乱が頂点に達する直前、停電したときと同様、唐突に室内にパッと光が戻ってきた。

「き、君、一体何をしているのかね?」

光が戻ってきたと同時に腕の中の彼女が若干上ずった様な声を上げるので視線を向けると、僅かに頬を紅潮とさせたヴィクトリカの顔がが思っていた以上に近い距離にあ

ると気づき、途端に自分がしたことを思い返し妙に気恥ずかしくなってしまった。
直ぐに距離を取りながら、先ほど暗闇の中でした物と同じ釈明をしようとするが言葉が上手く出ず、口ごもる。
「あ、いや、これは、ははは、その…。」
以下、九条一弥の脳内で刹那に行われた思考である。
おかしい！僕は紳士たるべきを身に付けるために留学して来た筈なのに女性と普段より少しばかり近づいて顔を合わせただけでこんなにもシドロモドロしてしまうなんて大日本帝国の三男として情けないにもほどがあるっ！いやそうじゃない違う、しかしヴィクトリカの顔って間近でみると本当に白磁のように綺麗で頬に指した紅色がまた愛らしさを感じさせる、ってこれではただの変態ではないかっ！喝っ！煩悩退散色即是空っ！落ち着け、落ち着くんだ僕よ、あれは危険が身に迫る恐れがあり事態は急を擁した為、ああした緊急策をとらざるを得なかった。決して疚しい気持ちは無い。よしこれだ！
と、少年が少女に先の所業についての弁明をしようと思索していた所で、部屋の僕たちが居り皆の視線を向けられていた丁度反対側の方から悲鳴が聞こえてきた。
「キャアアアア――――――!!!!」
悲鳴は部屋の反対側で赤いドレスを着た女性が上げたものだった、乗客たちは彼女の

方に視線を向けたことでその原因を理解した、それは壁に掛けられた絵だった。それだけならなんの変哲も無いが、問題はその上に書かれた血文字による文章だった。

血文字で文章が書かれていることを確認して壁の方に歩み寄る。壮年の紳士たちは動揺を隠せずにいるようで口から不安がこぼれだす。

「これは、一体っ…。」

「こんな血文字、さっきまで無かったはずだぞ!?」

紳士の１人が血文字で書かれた文章を声音を恐怖に震わせながらたどたどしく読み上げる。

「あ、あれから１０年、早い物だ、今度は貴様たちの番だ、箱は用意された。さぁ野ウサギよ、は、走れ。」

読み終えたところでこの怪奇的事象に脅えていた紳士の１人が尻餅を着く。その尻餅の音が合図になったのか、紳士たちの混乱が頂点に達する。

「う、うわぁっ」

「箱庭の夕べ、野ウサギ」

「野ウサギ走りを楽しめるんじゃなかったんだ、私たちこそが野ウサギだったのだ。」

「ひっ、ひいいいい、こ、殺される！あの子供たちに殺されるぅう！」

１人の紳士が足をもたつかせながら部屋の唯一の出入り口であるドアに向かって走

りより手をかける。
「無駄よっ！そのドアには鍵が掛かっていてっ！」
そう僕が目を覚ましたときに赤のドレスの彼女がドアには鍵が掛かっていると口を大にして言っていたのを思い出す。だが、その想像とは反対にドアは容易く開き、
「あ、開いた、ぐぁっ」
紳士が部屋を出ようとしたところで、脳天を矢で撃ち抜かれ死んだ。
「あ、」
死んだ、額のど真ん中だ間違いなく彼は死んだ。僕は、目の前で初めて人が殺されたのを目撃した事で思った以上にショックを受けている僕自身に動揺している事に驚いた。様々な感情が錯綜する。元々怪談や幽霊の話などは御伽話や勘違いだろうと信じてはいない。だが、人が殺された事実に動揺した僕が心を落ち着けるのを待ってくれるほど現実は優しくない。
「きやぁぁぁぁぁ!!」
女性が悲鳴を上げた事で正気に戻った。他の紳士たちはたった今、話をしていた仲間が死んだというのにも関わらず逃げ出すことを優先したようだ。
「あ、あのドアの罠はもう安全だ！に、逃げるんだ！罠は解除されたはずだっ！」
「よし！逃げるぞ！」

「行こう！野ウサギが来る！」
「急げ！船に殺されるぞ！」
紳士たちが脅えながら走って部屋の外に駆け出していく中、紳士達の内で一番若く１人だけ白いスーツを着た人物が呆然としていた僕といつの間にか横に居たヴィクトリカに声を掛けてくれたので、取り敢えず返事は返しておく。
「君たち！君たちも早く急がないとっ！」
「はいっ！」
声を掛けてくれた相手も言いながら駆けていき、赤いドレスの女性も続くように部屋から出て行く。
部屋は出遅れた僕とヴィクトリカが最後になった。僕は改めて死んだ紳士の遺体を見てしまうが、気を取り直して今まで無言だったヴィクトリカに声を掛ける。
「君は大丈夫かいヴィクトリカ？」
声を掛けるが返事は無く、するすると死体の横を通り過ぎながら部屋の外に出る彼女を見つめる。僕の横を通り過ぎる際にちらりと窺えた横顔に読み取れる感情は浮かんでおらず無感動に見えた。
船の廊下を出て先に部屋から飛び出して行った彼らを追いかけるとデッキに出た。外の天候は雨風が酷く波は大きく荒れている中、どうやら救命ボートで船自体からの脱

出を試みようとしているようだがそれは自殺行為としか思えない。
「救命ボートを使う気か!?」
白スーツの人が正気を疑うかのようなニュアンスで叫ぶが、僕も全く同意見だったし、目の前で死地に飛び込んでいく人に見かねて声を掛ける。
「こんな大荒れの海に出るなんて自殺行為ですよっ!?」
「危ないってば!!」
デッキの手すりに駆け寄って赤い彼女も忠告するように声を荒げるが、彼らには聞こえていないようだった。
「待てよっ!落ち着けおっさん!」
そう言って白い彼は救命ボートに乗り込もうとしていた紳士の1人を羽交い絞めにして止めるが、紳士は死にたくないと言わんばかりに暴れて喚き散らす。
「は、離せっ!この船に居ては、私も野ウサギになるっ!」
「おいっ、もう下ろすぞ!」
横着しているうちに操作していた別の紳士はボートに飛び乗り、無情にもボートは船から下ろされていく。
「お、おいぃ!待ってくれぇぇ!私を置いて行かないでくれぇ!」
「なんて無茶な事をっ!?」

　只でさえ大荒れの海に、操作ハンドルを手放しで勢いよくボートが落ちていくのだ、当然波によって傾いた海面に落ちた事でバランスが崩れ不安定になった重心が傾き、支えになっていたロープも千切れ飛び、救命ボートが揺れる。足場が不安定になった事で立っていられなくなった紳士たちが重なり合うようにして倒れこんだ視界には、ボートを飲み込むような高い壁が迫ってきて、
「「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」」
　呆気なく、そうまるで手の平で弄ばれたかのようにボートは波で転覆し、直ぐにボートも飲まれて消えてしまった。
　僕は紙が水に溶けるように消えた人の命を、その光景を直視する事が出来ず、どうにか引き止める事が出来た紳士はこの世の終わりを見たかのように意気消沈し、白い彼は１人しか止める事が出来なかったことを悔やむように声を張り上げた。
「馬っ鹿!!馬っ鹿野郎ぉぉぉぉっ!!」
　赤い彼女は手すりから離れ、僕らからも距離を取って、
「だから、警告してあげたのに。」
　と呟いた。
「終わったな。」
　これまで出来事に口を出さず、傍観に徹していた彼女・ヴィクトリカがやっと口に出

したのはやはり変わらず路傍の石をみるように無感動なものだった。どうしてかは分からないが、彼女のその時の表情は植物園で初めて会ったときの人形のような彼女、不思議な不思議なヴィクトリカ。彼女は一体何を思っているんだろうか？